
妖の巣食う屋敷

時間刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖の巢食う屋敷

【Nコード】

N5072X

【作者名】

時間刹那

【あらすじ】

とある山奥に佇む一軒の純和風の屋敷。

その屋敷には、古くから妖が住み着いていた。

あるとき、人の子がその屋敷の前に捨てられた。

屋敷にいた妖たちはその人の子を育てた。

その人の子はやがて大人になり子を産み、その子があるとき屋敷の妖たちの力を宿し、制御するようになった。

その子は人の子でありながら、妖の力を宿すことのできることから、のちに屋敷の妖たちからこう呼ばれた。

“
妖遠の妖”
と
…

はじまりの日

ここは、とある山のとある屋敷。

その一画で今日もまた、深夜2時だというのに騒いでいる連中がいた。

ガラッ

勢いよく僕が襖を開けると、その先にはいつもの事ながら、奴らがいた。

「おや？翔…久しぶりだな」

「ええ…お久しぶりです、氷狼様…半年ぶり…ですね？」

「おお？翔じゃねえか！久しぶり！！」

「久しぶり、炎龍。」

次々と翔に話しかけてくる者たち。

「時に翔何か用があつたのじゃないのかい？」

翔の真横から一人の女性が言った。

「あ、はい。忘れかけていました。ありがとうございます、雪女さん」

「礼はいいからはやく話をしなさいな」

奴ら、とは妖怪たちのことだ。

はい、と一拍あけ翔が話を切り出した。

「今日をもって、僕は正式に墨永の名を継ぎました。なので、ここへは君たちと契約をしに来ました」

おおー！！

湧き上がる歓声。まるで、やっとこの時がきたかのような歓声だった。

「うむ、了解した。———やっと、奴との契約が終わるのだな…短いようで永かった…この100年間ずっと奴に支配されていたがそれも今日で終わりだ。———礼を言おう、翔」

苦笑いする翔。^{かける}

「僕は別に何もしていませんよ。ただ、あいつの鼻をへし折ってやりたかっただけです」

一斉に笑い出す妖怪たち。

「さて、契約に移ろう」

氷狼の言葉に頷く妖怪たち。

「——時は動きはじめる。ゆっくりと穏やかに。…我名は墨永^{わがな}翔^{かける}。妖遠^{ようえん}の妖となる者^{あやかし}。

契約の血においてそなたらの妖遠^{ようえん}の妖になることを願う^{あやかし}」

「許す。そなたを今をもって、我らの妖遠^{ようえん}の妖とする^{あやかし}」

「ありがたき幸せ」

一瞬の沈黙。そして——

「では、そなたに我らの力を託す。——これでお前も一種の妖だ。気をひき締めていけ」

「うん、もちろん。…にしても、妖の体になったのはいいけど、名前をどうしようかなあ…」

うん…

「歴代の妖遠の妖たちも名前は変えていたし、そもそも話し方から変えてた奴もいたからなあ…」

炎龍の言葉に一斉にうなる妖たち。

「真^{まこと}の名は使うべきではないな…」

「…翔^{しょう}っていうのはダメかな？」

『！！』

絶句する妖たち。

「それは、あなたの昔の名だったよね？」

「うん」

永い沈黙…。

「…ダメかな？もう何年も使ってないしさ…」
確認するように言う翔^{かける}。

「いや、いいだろう。翔しょうそれがお前の妖の名だ」

「了解です。…そういえば、僕は君たちをなんて読んだらいいの？」

「お前が好きにつけるといい。お前の母もそうしていた」

「了解！」

「あと炎龍も言っていたが、妖のときは口調をかえておけ」

「了解？」

僕は不思議に思っ言葉が疑問系になった。

「例えば、お前の母は人のときは一人称が“アタシ”だったが、妖のときは“私”わたくしとわけていた。お前の母はそのほうが何かと便利、と言っていた」

「…なるほど、確かに都合がよさそうですね。…了解です。“僕”から“俺”へと妖のときは変えます」

「つと、こんなもんじゃねえか？」

「こんなものでしょう」

炎龍の意見に相槌をうつ雪女。

「あらためて、よろしくな、皆！…！…こんな感じ？」

「いいんじゃない？」

こうして、この屋敷での波乱の日々が幕を開けた。

人と妖

「…母様、神様っているの？」

幼い子供が小さな声で母親に聞いた。

「馬鹿！そんなこと、今口にするんじゃないよ！-」

母親は小さな声で子供を叱った。

「ごめんなさい…」

素直に謝る子供。そして、そんな子供をそっと抱く母親。

「いい子ね…もう少しの辛抱だから…ね？」

子供は、母親の言葉に小さく頷いた。

「おい、女とガキ」

背後から急に声をかけられた二人は驚いた。

「何でしようか、お役人様」

落ち着いた口調で答える母親。

「今、神がどうか言っていたな？」

「いいえ、そんなことは一言も申しておりません」

あくまで白を切る母親。

「いいや、言った。少なくとも俺にはそう聞こえた。よって、お前らを死刑とする」

「そんな！-！私たちはそんなことは一言も申しておりません！-」

そんなことは知らない、と言い刀を抜く役人。

「ま、待って下さい！-！どうか、この子だけはお許し下さい！-」

土下座して許しを請う母親を「邪魔だ、ドケ！-」と言い蹴り飛ばした。

「母様！-」

母親に近づこうとする子供の前に役人が立ちふさがる。

「…誰か、私…の子供、を助け…て」

涙を流しながら言う母親。

だが役人を恐れてか、誰も助けようとしな
目を逸らしてしまい、逃げる者さえもいた。

「いいかあ、ガキい。これは、お前を殺すための道具だ、わかるよ
なあ？」

「あ、…ああ…ああ…」

恐怖で声にならない叫びをあげる子供。

「ひっひっひ。ああ、こわいよなあ！！もうすぐ自分が死ぬってん
だからなあ！！」

一人酔いしれる役人。

「なんてひどいことを…アレが役人のすることなのか…」
うなだれる町人。

「運が悪かったなガキ！この俺、さがみだいじろう相模大二郎がこの場にいたことを
あの世で恨みな！！」

名乗りながら、下品に笑う役人。

「死ねえ——！！！」

という役人の雄たけびと共に刀が振り下ろされていく。

「やめてええええええええええええええええ——！！！」
緊迫した空気に母親の悲鳴が響く。

その光景に目を伏せる町人たち。

「あんな小さな子供が何をしたって言うんだ…」

次に口を開いたのは母親だった。

「…あの子が、殺された…？…い、いや…嫌あああああああ
！！！」

顔を抱えながら泣く母親。

「なっ！！！」

驚きの声を上げる役人。

それもそのはず。男の振り下ろした刀は、子供に届くことなく、二人の間に割り込んだ男が両手で振り下ろされた刀を片手で止めた。しかも、その男の手は手甲というにはあまりにも薄い布をはめた素手と言っても過言ではない手で止めていた。

城下町

「て、てめえは何者だ!!」

建物の影のせいで男の顔がよく見えない。

「何者だつて聞いてんだよ!」

男は吸っていたキセルの煙をはいた。

フ

月明かりが男の顔を照らし出す。

役人の顔が明らかに青ざめていく。

「お、お前は……!!」

役人は何か言おうとしたが男の声にさえぎられた。

「うせろ、目障りだ」

男は役人の刀を握ったまま、役人の腹に膝蹴りをかました。

「グアッ!!」

役人はなすすべもなくその場に崩れ落ちる役人。

男は目障りな奴は消えた。用なし。

とふんだのか、何も言わずにその場から立ち去っていった。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「久しぶり、翔^{かける}ケン」

翔は背後から急に声をかけられた。

振り返るとそこには一人の少女がいた。

「久しぶり、佐山」

「三年ぶりかな? 懐かしいなあ」

「そうだな……」

笑顔で答える翔^{かける}。

が、その笑顔には「用がないのなら話しかけるな」としつかりかかれていた。

「今私ね、そのてい食堂で働いているの。君は？」

「うん、まあ、それなりにやってる」

（世間話してきたのかよ）

「えゝ何それ。教えてよ」

苦笑いを浮かべる翔。^{かける}

隠す気すら起きない。

（早くここから立ち去りたいんだが…）

「あ、いたいた。こんなとこで何してんだよ、翔」^{かける}

話に割り込んでくれたのは一人の大柄な男だった。

「ったく、ちよつと休憩入れてくるって行ってから、どれだけ経つてると思ってるんだよ！」

「悪い、昔の知り合いにあつてな会話に華を咲かせてたんだよ」

「ったく、帰るぞ翔」^{かける}

そついうと翔の腕をつかんで引つ張つていこうとする男。

「まあ、そついうことだから。じゃ」^{かける}

男の手を振り払うと翔は男に続いて人ごみへと消えていった。

人

「まったく、相変わらず人間に関わりやがって」
ぼやく男。

「いいだろ別に、元は人間だし。それにさっきのは向こうから話しかけてきたただけだ」

「元、な」

言葉を詰まらせる翔。

「なあ、炎龍」

急に立ち止まる翔。

「なんだよ、そんなに改まって。楽にいこうぜ、楽に」
頭の後ろで腕を組む炎龍。

「僕はなんていう名前…種類の生き物なんだろう」
真顔で翔の顔をのぞく炎龍。

「お前…頭でも打ったか？」

ブチッ――

何かが切れる音がした。

はぁ――

長いため息をもらす翔。

「…うん。お前に聞いた僕が悪かった」

そうつぶやくと家へ、別名『妖が巢食う屋敷』へと帰るべく、とま
った足を動かしはじめた。

屋敷

「ただいま」

翔が屋敷の扉を開けるとそこには一人の少年が立っていた。

「おかえり…翔…」

そう言うとなぜか頬を赤らめて屋敷の奥へと少年は逃げるように走り去っていった。

「ひゅ〜、翔はモテモテだな」

「炎龍：白虎^{はくと}はただ恥ずかしがっているだけだと思っただが…」
気にしねえ〜、と言い残し炎龍も屋敷の奥へと入って行った。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

大広間の襖を開けると案の定妖怪たちが昼だというのにドンチャン騒いでいた。

(…昼間から…頭痛が…)

目頭をおさえる翔。

「いい加減なれたらどう？」

酒瓶を片手に持ちながら言う女。

「俺的には慣れたくないなあ…慣れたって言う砂雪がすごい…」

苦笑いする雪女の砂雪。その顔は酒のせいか少し赤みを帯びている。

「もう十年か…早いわね…翔も今年で二十三になるのね…」

感慨深そうにつぶやく砂雪。

「俺はもう人ではないからな…しばらく死ぬことはないだろうし、そんなことを十年立つ度に言ったら疲れるぞ？」

微笑む砂雪の顔は、とてもうれしそうだった。

(砂雪、うれしそうだ)

心の中で翔は素直にそう思った。

妖の主

「翔、帰ってたのか」

上座に座る大きな狼の妖が言った。

「ああ、ただいま氷狼様^{ユウリキ}」

にこやかに返す翔。

頷き返す氷狼。

そんな軽い挨拶を済まし、さらに奥へと翔は入っていった。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「にしても」

部屋の奥では相変わらず、妖怪が飲んだくれていた。

（まだ、日が出てるってのに… ったく… はあ…）

翔は心の中で人知れずため息をついた。

「いいじゃないか、仕事も今はないんだし」

酒を飲みながら言う青年。

「水龍… 何があっただんだ…？」

足元で酒瓶をあおる水龍に目をやる翔。

「何って、見ての通りとしか言いようがない…」

上半身をさらけ出した状態で、酒瓶をあおっている水龍。

「そうか… どんまい…」

水龍から目を逸らす翔。

「ったく… なんだって俺がこんな格好をとさせられんだ…？」

「水龍、とりあえず袴をきちつと着ろ」

ったく、とぶつぶつ言いながら袴をただす水龍。

他の妖怪たちも水龍と似たような格好で酒を飲んでいた。

「さて、全員聞いてくれ」

翔が話し始めたたんとその場の妖怪たちが酒を飲む手を止め、翔のほうを見た。

「城下の辻斬りが、ついに俺たちの仲間にも手を出してきやがった」

ザワザワ――

ざわめく妖怪たち。

人間の分際で…

俺たちに勝とうなんざ百年早いんだよ

と口々につぶやく妖怪もいる。

「それもあり、城下の仲間から正式な仕事の依頼がきた」

この屋敷に巣食う妖たちは毎晩遊んでいるわけではない。

仕事というのは、城下町に住まう妖怪たちの依頼に応じて行っ、いわゆる何でも屋をしている。

遊んでいる日が多いのは否定しないが…。

何日かに一度城下町に住む妖怪たちからの依頼がくる。「人間が俺らを苛めてくる！助けてくれ！」など内容はさまざまだが、人間を懲らしめてくれという依頼がくる。そんな仕事をこの屋敷の妖たちは主に生業としている。

人間だからといってむやみやたらに殺すと、翔に逆に殺されるし、殺さないでおくとまたやる阿呆もいる。見極めが大切な仕事なのだ。そんな見極めをし、人間と妖怪の微妙な均衡を保たせるのが、その間の存在である“妖遠ようえんの妖あやし”の役割であり、責務だ。

黙って翔の話を聞く妖怪たち。

「今夜、そいつを討つ！」

先程までとは違う張り詰めた空気をだす翔。

「確か一ヶ月程前から盛んになったやつだったよな」

あくまで確かめるように言う炎龍。

「ワシの調べだとここ一ヶ月で約四十人以上の人間を殺している」
ずいぶん前から依頼されていたのか、次々に調査結果を報告する妖

たち。

その中で翔の耳にひっかかる言葉が聞こえた。

「そいつの手口がまたひどいんすよ…。首を刎^はねたり、体の一部を切り落したり…」

「それは本当か、煉」

無言で頷く茶髪の青年。あどけなさの残るその顔には不釣り合いな角が一本頭から生えていた。

「…よし——用意をしとけよ、お前ら」

頷きそれぞれ散っていく妖怪たち。

「分かった、ここに今いない奴にも伝えておく。お前も用意をしてこい、翔」

「ああ」

翔はそう短く答えると、大広間を出た。

仕事

夜になり、玄関口に集まった妖怪たち。

翔の指示を聞き、行動に移り始める妖怪たち。

「さて…以上が今回の仕事の役割だ。今回は今までの奴と違う
会ったことは無いはずだが言い切る翔。

「見えたんですかい？」

たずねる青い子鬼。

その質問に無言で頷く翔。

翔の答えにざわつく妖怪たち。

「落ち着きな。翔はいつも言ってるだろう？“変えられないことな
んて何一つ無い”って」

壁にもたれかかっている首の無い少女が言う。

「凜の言うとおりだ。変えられないことは無い」

全体を見渡しながら言う翔。

誰一人として翔から目を逸らさずにいる。

「行こう。俺らの仲間に手を出したことを後悔させてやろう」

「散^{さん}」

翔がそう言った次の瞬間には翔を含め、誰一人としてその場にな
かった。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「ヒック…うい…飲みすぎたかあ、ひっく」

酒瓶片手に千鳥足で歩く男。

どん

正面から来ていた人間とぶつかり、その場にしりもちをつく男。
「うい、ヒック…おっと、すまねえ…ヒック」

「こちらこそ…すまねえな…ここらには最近辻斬りが出るらしいから」

気をつけて帰れよ、そう言いきる前に正面から来た人間は首からまるで噴水のような血しぶきをあげた。

「え…？」

啞然とする男。

正面から来ていた人間の後ろにいる人影が手にしているのは、一本の刀。

その刀身は血にまみれ紅く染まり、たくさん刃毀れしていた。男自身も、返り血を浴び紅色に染まっていた。

「辻斬りには気をつけるよ？あの世でな」

刀を横に薙ぐ血まみれの男。

「——！！」

声にならない悲鳴をあげ倒れる酔っ払いの男。

その体は真つ二つに切り裂かれていた…。

「まだだ…まだ足りない…。——なあ？鋼鐵^{こうてつ}。もっと…もっとた
くさんの生き物の血を…」

月明かりに照らしだされる血まみれの男と刀——鋼鐵。

その姿はさながら、人を捨てた妖のようであった…。

妖落・あやかしおち・

「これは…」

翔たちの足元には、二つの死体。

「ひどいことをする…」

（これが人のすることなのか…？）

片方の死体は首が刎ねられたのか、横に転がっている。

もう片方の死体は、体を上半身と下半身とに斬られていた。

「まだ新しい…」

翔がつぶやいた。

「追えるか…白虎^{はくと}？」

翔が白虎に問う。

「匂いが残っている…今ならまだ追える」

「よし、辻斬りを追うぞ。——白虎、お前の上に俺らはついていく…先行を頼む」

白虎が無言で頷くと、翔たちは白虎を先頭にその場を去っていった。

時は遡ること数刻前、同じ場所にて…

「これは…」

一組の男女の足元には二つの死体。

「妖の仕業か…？」

男の方が目を細めながらつぶやいた。

「違うわ…この感じ…妖にしては汚いわ…。妖はもっと綺麗に殺すもの…」

女の方が答えた。

「…だとすると…妖落^{あやかしおち}…か…？」

「十中八九そうですね…」

無言になる男女。

「行こう…早く探して始末しなければ…」
「ええ」

[illegible]

下に広がっているのは、真つ紅かな血だまり。
その中心に立つ一人の血まみれの男。

男の持つ刀から血が流れ落ち、刃があか紅く光って見える。

リン

何だ！？今の音は！？

(チツ…役人か…まあいい)

（今日は満月か…）

「明日は十六夜……俺が——には最高の月だ……」

ふつ

男はそう言い残すと、闇へとまぎれていった……

陰陽師

月明かりが城下町を明るく照らす。

「十六夜…」

翔は一人つぶやく。

（昨日は結局見つけられなかった…）

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

昨晚――

「匂い…こつち…」

白虎を先頭についていく翔たち。

カサツ――

屋根の上を走る翔の耳に人間なら気付かないような小さな音が聞こえた。

「誰だ!？」

翔が立ち止まり、一点を見据え構えをとる。

翔の行動に一同もまわりを警戒し、それぞれ構えた。

「さすがは妖。――あんな小さな音でも感づいたか」

一組の男女が翔の見据えるところから出てきた。

「何者だ!」

炎龍が翔を背後に形で一步前に出る。

「お前たち妖の天敵…といえば分かるか？」

「…陰陽師か」

翔がつぶやいた。

「ご名答。――本来なら、すぐに滅したいところなんだが…」

男が語尾を濁す。

「辻斬りか」

「…ご名答。奴はおそらくもうすぐ——」

「修羅しゅらの妖あやかしとなるだろう」

翔が男が言う前にそう言った。

「ほう…ということはお前たちも辻斬りを追っているのか？」

「ああ。仲間が何人か殺やぶされた」

「…意外だな。妖にも仲間を思いやる心があるんだな」

ふんつ、と鼻を鳴らす男。

と、次の瞬間！

「！！」

男が声にならない悲鳴を上げた。

獣のような耳を持った女が、男の首にクナイをあてた。

そのクナイは、男が少しでも動けば確実に血があふれ出すほどにまで密着させている。

「…調子に乗るなよ人間。我らの主あるじを侮辱する奴は誰であろうと許さん！」

ものすごい殺気をほとばしらせながら、女は言う。

「やめろ、猫娘」

「しかし…」

翔が猫娘にそつと微笑む。

「主がそういうなら…」

クナイをどけ、翔の後ろへと戻る猫娘。

「さて…」

口に銜はえていたキセルの煙を吐きだす翔。

「妖の主ぬし…お前に少し、話がある」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5072x/>

妖の巣食う屋敷

2011年11月24日19時47分発行